慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『エンネアデス』・ 第六論集・ 第六論文 : プロティノスの数の形而上学
Sub Title	Enneade VI, 6 : Plotins Zahlenmetaphysik
Author	堀江, 聡(Horie, Satoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1993
Jtitle	哲學 No.94 (1993. 1) ,p.1- 23
JaLC DOI	
Abstract	Der Titel der Enneade VI, 6 ist: "Von den Zahlen". Es handelt sich darin nicht um die gewohnliche Zahl, sondern um die sogenannte Ideenzahl, die in der intelligiblen Welt zu finden ist. Im Kapitel 4 werden drei Hypothesen daruber nacheinander aufgefuhrt, wie sich die Zahlen und die anderen Ideen zueinander verhalten: (I) Die Zahlen sind abhangig von den Ideen, und bestehen nur in unserem Gedanken, oder (II) Sie sind abhangig von den Ideen, aber sind real, oder (III) Sie sind real, und unabhangig von den Ideen. Indem im Kap. 5 (I) und (II) widerlegt werden, erweist sich (III) als Plotins Position. Als Konsequenz der Kap. 6 und 7 werden die Ideen im Kap. 8 in drei Phasen, d.h. in "das Seiende", "den Geist" und "das Lebewesen an sich" aufgeteilt. Und daraus ergibt sich die Frage: In welcher Phase bestehen zum ersten Mal die Zahlen als das Vielheit erzeugende Prinzip? Weil viele Bestandteile sowohl im Geist als auch im Lebewesen schon das Erzeugnis der Zahlen sind, mussen die Zahlen als Vielheit Erzeugende in das Seiende hingestellt werden. Nun bleibt nur ubrig, die Beziehung zwischen dem Seienden und den Zahlen zu untersuchen. Die Zahlen sind nach Kap. 9 die Kraft des Seienden selbst, die es zerteilt, so dass Ideen werden. In den Kap. 10, 11 und 16 wird dieser Prozess vom Seienden zu den Ideen in zwei Stufen ausgefuhrt : (1) Viele Einser wachen im Seienden gleichsam auf, und bieten sozusagen den Raum fur die Ideen, die sich auf ihnen griinden sollen; (2) Einige Einser vereinen sich miteinander auf ihre Einheit hin, die dann an die Ideen angepasst wird. Die intelligiblen Zahlen sind schliesslich die Kraft des Seienden, die einerseits als Viele-Einser die Absonderung der Ideen voneinander, und anderseits als Ein-Vieles Verknupfung der Ideen miteinander gewahrleistet.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000094-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『エンネアデス』・第六論集・第六論文

——プロティノスの数の形而上学——

堀　江　聡*

Enneade VI, 6

—Plotins Zahlenmetaphysik—

Satoshi Horié

Der Titel der *Enneade* VI, 6 ist: „Von den Zahlen". Es handelt sich darin nicht um die gewöhnliche Zahl, sondern um die sogenannte Ideenzahl, die in der intelligiblen Welt zu finden ist.

Im Kapitel 4 werden drei Hypothesen darüber nacheinander aufgeführt, wie sich die Zahlen und die anderen Ideen zueinander verhalten: (I) Die Zahlen sind abhängig von den Ideen, und bestehen nur in unserem Gedanken, oder (II) Sie sind abhängig von den Ideen, aber sind real, oder (III) Sie sind real, und unabhängig von den Ideen.

Indem im Kap. 5 (I) und (II) widerlegt werden, erweist sich (III) als Plotins Position.

Als Konsequenz der Kap. 6 und 7 werden die Ideen im Kap. 8 in drei Phasen, d.h. in „das Seiende", „den Geist" und „das Lebewesen an sich" aufgeteilt. Und daraus ergibt sich die Frage: In welcher Phase bestehen zum ersten Mal die Zahlen als das Vielheit erzeugende Prinzip?

Weil viele Bestandteile sowohl im Geist als auch im Lebewesen schon das Erzeugnis der Zahlen sind, müssen die Zahlen als Vielheit Erzeugende in das Seiende hingestellt werden.

Nun bleibt nur übrig, die Beziehung zwischen dem Seienden und den Zahlen zu untersuchen. Die Zahlen sind nach Kap. 9 die Kraft des Seienden selbst, die es zerteilt, so daß Ideen werden.

In den Kap. 10, 11 und 16 wird dieser Prozeß vom Seienden

* 慶應義塾大学文学部助手（哲学）

zu den Ideen in zwei Stufen ausgeführt: (1) Viele Einser wachen im Seienden gleichsam auf, und bieten sozusagen den Raum für die Ideen, die sich auf ihnen gründen sollen; (2) Einige Einser vereinen sich miteinander auf ihre Einheit hin, die dann an die Ideen angepaßt wird.

Die intelligiblen Zahlen sind schließlich die Kraft des Seienden, die einerseits als Viele-Einser die Absonderung der Ideen voneinander, und anderseits als Ein-Vieles Verknüpfung der Ideen miteinander gewährleistet.

はじめに

『エンネアデス』・第六論集・第六論文は，「数について」という題名をもつ．プロティノス自身は自らの論文に表題をつけなかったので，他人が各人各様に名づけるようになり，そのうちでもっとも優勢であったものが高弟ポルフュリオスの『プロティノス伝』に保存されるところとなった[1]．『プロティノス伝』には第4章から第6章にかけて年代順に並べられた表題一覧が，第24章から第26章にかけてエンネアデス順に並べられた一覧表が掲げられているが，かくのごとき事情から同一論文の題名が両箇所でII, 9 のように（「グノーシス派の人々に対して」と「世界創造者は悪しきものであり，また世界は悪しきものであると主張する人々に対して」）微妙なずれを来していることもある．ところで，VI, 6 については一致して「数について」という表題が伝わっている．もっとも，これは著者自身が冠した題ではなく，聴衆或いは読者が恣意的に決めたのだと抗弁することによって，題名と内容の喰い違いを指摘することも一般論としては可能だろう．また実際，他のプロティノスの論文のなかにはこのように扱わねばならないものも当然あるだろう．だが，こと VI, 6 に限っては，使用頻度のもっとも高い二つの語が，「一」(190 回) と「数」(111 回) なので[2]，一を数のうちに含めるか否かの議論 (cf. 16, 9–11) はさておいて，VI, 6 は一をも論じつつ数を主題にした論考であると見なしてよいだろう．

しかし，「数について」という表題が我々の日常の演算操作の対象とし

ての数の分析を現代人に期待させるとしたら，これは誤解を招く不正確な題名であるとしなければならない．そのような数はごく付随的に，しかも否定的に触れられるだけで，ここではむしろプラトン以来伝統のいわゆるイデア数が主題となり，その結果抽象的で容易には理解しがたい数の形而上学が展開されているのである．

ところで，古代ギリシアでは，「数について」というタイトルをもつ書物はほとんど一つの文芸ジャンルを形成するほどに流行的なものであったという[3]．そのような名の書を執筆した代表的な例としては，デモクリトス，スペウシッポス，クセノクラテス，テオフラストス，アレクサンドリアのフィロン，ヌメニオス，プロティノス以後では，ポルフュリオス，プセッロスなどを挙げることができる[4]．

また，最近の D. J. O'meara の研究書では[5]，ポルフュリオスの弟子でプロティノスの孫弟子と一般に言われているイアンブリコスにおける数の形而上学の再構成を通じて，ピタゴラス主義，新ピタゴラス主義の伝統がイアンブリコスで大きな発展を遂げ，シュリアノス，プロクロスなどの後期新プラトン主義に打ち消しがたい波紋を投げかけた様子が詳細に跡づけられている．このような流れのうちに，プロティノスの「数について」をおいてみるならば，今まで余り注目されてきたとは言いがたいこの論考の哲学史上の重要性が改めて問われなければならないことがわかるであろう．

プロティノスのギリシア語テクストとして P. Henry と H.-R. Schwyzer 校訂による *O.C.T.* の editio minor の第三巻[6]，つまり「数について」を所収する巻が出版されたのが 1982 年，穏者な解釈を提示したものとして比較的信用できる A. H. Armstrong の *Loeb Classical Library* 第7巻の英訳は1988年[7]，「数について」に専一して書かれたフランスの碩学6人の手になる共同注解書は[8]，高々十数年前の1980年に遡るにすぎない．この事実は，テクストが早くから整備され，一つの著作について大概複数

の注解書が我々に参照可能なプラトン，アリストテレス研究の場合と比べて，プロティノスの「数について」研究はまだ緒についたばかりであるということを告げている．私は最後に言及したフランス語の注解書の出現によって，内容理解の水準が飛躍的に高まったことを認めるのに吝かではないけれども，まだまだ個々のテクストの解釈に関して不満を抱いている．以下で私が試みる論述は，問題の解決というよりは，問題提起と呼ぶ方がふさわしい．

序論部：第1章から第3章

さて，プロティノスの著作の特徴でもあり，魅力ともなっていることの一つに，思弁的な面と倫理的な面が緊密に融合しつつ思索が展開するということがある．その表題とは裏腹に「数について」もその例外ではなく，第1章冒頭は次の文で始まっている．

「一体，多は一からの離脱であるのか．そして，無限は数えられない多である故に完全な離脱であって，それゆえに無限は悪であり，また我々も多であるときに悪しきものであろうか」(VI, 6, 1, 1–3)[9].

大雑把に言って，プロティノス哲学の世界では，頂点に一者があり，直知界，魂の世界，感性界と下降するに従って逐次一に多が増し加わり，質料界に至って完全な多としての無限へと溶解してしまう．この基本構図に照して，確かに多は一からの離脱であるのだが，直ちに多を悪と等置にすることはできない．なるほど，この書き出しに続く部分では，一と多のそれぞれに善と悪，内と外，自己と他者，統一と拡散，存在度の多少，原初の状態とその喪失，美と醜(無秩序)が重ね合され，あたかも双欄表の右と左に対立性格が配分されているようにみえる．とりわけ，一方から他方への移行を本来向かうべき方向についての無知に帰因する (1, 14–15) とか，恐しいこと (1, 8–9) とか，空虚である (1, 11) と否定的に性格づけることにより，第1章全体は否応なくペシミスティックな雰囲気を揺曳させて

いる.

だが，感性界を悪しきものとするのはたとえばグノーシス主義であって，プロティノスにおいては感性界は直知界よりは劣っているにしても，可能なかぎりもっとも忠実にかの世界を模倣した美しく善きものとして捉えられているものである (cf. 15, 3-5)[10]. したがって，第3章で，他の議論よりもさきに (πρότερον, 3, 3) 想起すべきこととして，「もし真実に有るものどもにおいて多があるならば，どうして多が悪であろうか」(3, 3-5) と，第1章の路線を修正するような言明があるのは蓋し当然と言わなければならない．その意味で第一章の冒頭の文は，プロティノスの立場そのものではないことになり，疑問形で始められなければならなかったのであろう．真実に有るものどもは，多をもつが故に一者より弱小化しており，一者と比較するかぎりにおいては劣ったものであるが，一者の傍らで (παρὰ ἐκείνῳ) 分相応に一であることによって尊厳を保ってもいるのである (3, 4-9).

我々は総じて一と多を対立したものとして，また相互に没交渉であるかのように表象したがちだが，実は一は多の内奥に忍びこんでいる．なぜなら，多が多として存立するためには，多の構成要素がそれぞれ一でなければならないからである (3, 36-37). さもなければ，多は無限へととめどなく流れ行き，客観的存在として存立することすらできなかったであろう (3, 2). したがって，一と対立するのは無限なのであって (cf. 17, 3)，無限が一によって囲みこまれることによって多としてとどまるのである．つまり，無限の否定的側面が一の肯定的側面を通じて緩和されてしまったものが，プロティノスにとって多として現れる．多の各構成要素が一であるということは，多全体が複数の一によって占有されてしまっているということであり，数が多全体を摑まえていることである．限定 (πέρας) という機能を媒介として，一と数は親近的関係にあり，両者と無限は敵対的関係にある．「存立してきて存在しているものは，既に数によって占領されて

しまっているものなのである」(3, 2; cf. 1, 23–24; 2, 9; 2, 16) と語られるのも，存在者が数を前提しているからである．

それでは，無限は存在しないのか．まず第2章では，無限の数と通常言われるものの位置が決定される．無限数に客観的存在は認められず，それは我々が (ἡμεῖς, 2, 10) 或る数の次の数を際限なく考えることができるという意味で無限であるにすぎない．我々は無限なものを数えることはできないし (2, 4)，数を何倍に増やしてみても数を限定してしまうだけである (2, 5)．結局，数える主体が所与の数をその度ごとに超出していく数を思念する (ἐπινοῆσαι, 17, 7; τῇ διανοίᾳ, 17, 9; τὸ ἐν σοὶ μόνῳ νόημα καὶ φάντασμα, 17, 9–10)[11] 可能性 (ἐξεῖναι, 2, 8) を有しているということが無限数の成立基盤なのである．しかし，このような数は，数の影像 (εἴδωλον, 2, 13) にすぎない．裏を返せば，プロティノスが照準に定めた数とは，影像ではなく実在の数であり，数える主体が任意に操作可能な数は早くもここで考察の射程から遠ざけられてしまうのである．

第3章では，無限数に続いて徹底的な多 (3, 5) としての無限へとまなざしが向けられる．ところが，直知界においては無限は既に規定されてしまっているし (2, 9–10; 3, 10)，生成界においても無限を見出すのは容易ではない (2, 2–3; 3, 11–12)．そこで，本来不可能なものを思考実験として引離すことによって (χωρίσας τὸ εἶδος τῇ διανοίᾳ) しか無限を表象することができない．

「いや[12]，それはたとえ規定されるとしても，少なくともそのためには無限なものであった．なぜなら，規定されるのは限定ではなく，無限なものだからである．というのも，実際境界の本性を受け容れるものは，限定と無限の中間にある何か別のものではないからである」(3, 12–15)．

ここでは，他ならぬ限定を受け容れたという事実から，限定を受容するところの限定なきものが辛うじて掬いあげられている．第2章において数の無限が単に我々の思念のうちだけを棲家とするのに対して，ここではこ

の無限は実在する無限であり，考えうるかぎりもっとも数による限定から遠ざかったものである．この無限それ自体 (αὐτό, 3, 15) は大と小，動くものと静止したものなど同時に相反するものであったり，同時にその両者でもないものとなり，悉く限定相を逃れるものであるが，外側から限定者によって取り囲まれ閉じこめられ (3, 16; 3, 41–42) なければ，この宇宙に場所 (3, 18) をもつことはない．逃走と追跡という狩りのメタファーによって描かれる[13] この闘争において，限定者の一方的勝利を認めるわけにはいかないにしても，無限の極においても限定者の支配が行き渡り，一に敵対する無限の力はプロティノスの宇宙でかなり弱められたものであることは確認できるだろう．

これに対して直知界では，数の支配は最大限に発揮され，諸有の規定が数の規定と相即し (2, 9–10)，諸有の総数に不定の要素が入りこむ余地はない (9, 22–23; 10, 9–13)．第4章から始まる本論でプロティノスが真実の数を探り求めるのは，他ならぬこの直知界においてである．

本　論　部

第4, 5章：数と諸形相の関係に関する様々な仮説とその検討

第4章では，直知界において数と諸形相の関係がいかなるものか，まず考えられうるいくつかの仮説が列挙されている．

(I)——「数は他の諸形相に付加的に生じるもの (ἐπιγινομένων) としてあるのか，或いはまた諸形相に随伴するもの (παρακολουθούντων) としてつねにあるのか．たとえば，実有 (τὸ ὄν) はそれ自身で第一にあるようなものであるから，我々はそれを一つと考えるのであり，次に実有から動と静が生じたので既に三つと考えるのである．そうして，他の各々の形相にも各々の数を」(4, 2–6)．

(II) (a)——「いやそうではなくて，各々の形相に一つの一がともに産み出された (συνεγεννήθη) のである」(4, 6–7)．

(II) (b)——「或いは，一方第一の実有には一が，他方それに続くものには，もし順序があるならば二が，或いはまた各々のものに含まれるかぎりの多（なる要素）に応じて，たとえばもし（或る形相が）十のものを含むならば，十がともに産み出されたのである」(4, 7–9).

(III)——「いやそうではなくて，数はそれ自身で独立に（αὐτὸς ἐφ' ἑαυτοῦ）考えられるようなものである」(4, 9–10).

(III) (a)——「そしてもしそうであるならば，数は他の諸形相より先なのか」(4, 10–11).

(III) (b)——「後なのか」(4, 11)[14].

さて，以上の列挙からまず読みとるべき点は，(I) (II) と (III) との間に大きな溝があるのであって，(III) がプロティノス自身の立場とすれば，(I) (II) はともに否定さるべき立場だということである．したがって，(I) と (II) の間の差はときに相互に交錯するほどまでに縮まり，その境界線は曖昧である．ここに，(I) (II) (a) (b) 間の線引きをめぐって諸家の見解がわかれる原因があったと考えられる．

(III) が諸形相からの数の独立性を説くのに対して，(I) (II) は数の諸形相への従属性（依存されるものの方は与格で現れる．4, 2; 4, 6）を主張する．(I) と (II) の差は (I) における数の諸形相に対する後発性（ἐπί），(II) における同時発生性（σύν）に存しているように一見みえる．しかし，一般に相互の独立性を暗示しかねない同時発生性が，むしろ依存性の下位区分として (II) で現れるのは注意を要する．5, 41–45 の例から判断すれば，(II) の場合，数は諸形相の付帯性（συμβεβηκός）としてか，或いは結合体の構成要素（στοιχεῖον）として考えられていることがわかる．それゆえ，動詞前綴の συν- は時間的同時性のみならず，与格目的語を伴って (I) と同様に依存性を表現していると解するほかない．

それでは，(I) と (II) の相違はどこに求めるべきか．(II) では，数は諸形相に伴われる仕方であれ，付帯性ないしは構成要素として実体よりは

存在度が劣るとしても，とにかく客観的実在性を有するのに対し，(I) の場合，数は諸形相の存在を機縁として「我々が考え出した」(ἐνοήσαμεν, 4, 4) ものにすぎない．

(I) から (III) の諸説提示の直後に (4, 11–20)，人間が数の観念に到達したのは，数に先在する昼と夜の相違性に触発されて，魂が或るものから他のものへと経めぐる移行運動を行なったからである，というプラトンのテクストへの言及は，(I) の立場の一例として具体的に示すものであると言えまいか．

また，5, 16–21 では，事物に付加的に (ἐπί) 眺められる (θεωρεῖσθαι) ものは事物のうちに (ἐν) 存在をもたないことが言外に仄めかされている．

そして，決定的な箇所として 10, 9–11 では，数えられるべきものがあるかぎりの回数だけ，数える本性 (ἀριθμούσης φύσεως) が動かされることによって，数が諸有に付加的に眺められると述べられている．

したがって，以上の三箇所から，(I) は数える能のある魂において成立する思念的存在として数を捉える立場であると推定できる[15]．

結局，整理するならば，(I) は数を思念的依存的存在とし，(II) は依存的実在的存在とし，(III) は実在的独立的存在とする説だということになろう．

だが，問題は以下の点である．(I) を表わす語句は，4, 2 ἐπιγινομένων, 5, 2 ἐπιθεωρούμενον, 5, 17–18; 19; 20–21; 9, 6–7, ἐπὶ …… θεωρουμένου, 10, 10–11, ἐπ' …… ἐπεθεωρεῖτο であり，(II) を表わす語句が 4, 4 συνεγεννήθη, 5, 41, συνεγένετο καὶ συνέστη であると区分することは可能であろう．しかし，4, 3 の παρακολουθούντων (随伴するもの) は直ちに (I) の思念的存在とは等値にしがたく[16]，むしろ (II) に属する，依存的ながら実在する συμβεβηκός (付帯するもの) と近接した語だと見受けられる点である．この点に関してまず推論しなければならないのは，この「随伴するもの」という語を介して，先に触れたような (I) と (II) の境界線のぶれ，両者の

相互浸透が生じてくるという事実である.

第5章の冒頭で我々はそれを見ることができる.

「それでは，数の本性は何なのか．一体，数は随伴するもの (*παρακολούθημα*) であり，各々の実有にいわば付加的に眺められるもの (*ἐπιθεωρούμενον*) であるのか．たとえば，人間はまた一人の人間として，有るものはまた一つの有るものとして，また各々の直知されるもの全体がまた数全体として (眺められるものであるのか)」(5, 1–4).

ここでは，数の抽象的説明としては，(I) の随伴性と思念性が等値ないしは並列して扱われているが，他方例示に関しては，「各々の形相とともに一つの一が産み出された」とする (II) (a) に酷似したものが挙げられている．(II) (a) との相違を強いて探るならば，第5章の方では，人間とともに一人の人間が産み出されたのではなく，人間とともに一人の人間が眺められる，ということだろう．しかし，人間がまた一人の人間として眺められようが，実在しようが，或る形相を一つの或る形相として，一を形相に従属させるパターンそのものは (I) (II) に共通なものであり，「随伴するもの」という語を媒介にして (I) (II) が一括して (思念的随伴者であれ，実在的随伴者であれ) 批判されていく構図が第5章で現われていると思われるのである.

その第二の証左は，第5章の後半で (5, 29–38) 再び一人の人間の一が論じられる箇所である．人間だけでなく他のものにも一は共通である故，一が人間にも他のものにも先行して存在しなければならず，そうして初めて各々のものが一であることを獲得しうる (*τύχῃ ἕκαστον τοῦ ἓν εἶναι*, 5, 33–34; 36) と語られている．ここの一は直前に (5, 25–29)，思念的存在 (*ἡ τοιαύτη ὑπόστασις*, 5, 24) と異なり，独立して存在する (*εἶναι τι ἐφ' ἑαυτοῦ φύσιν τινά*) のでなければならない，という議論の結果を承けている (*ὥστε*, 5, 29) ので，明らかに実在する一を指している．それゆえ，一人の人間という同じ例が用いられつつも，第5章冒頭では人間がまた一人

の人間として眺められるという (I) が検討され，後半では人間がまた一人の人間として存在するという (II) が検討されるというずれがこの場合も確認できるのである．

第三に，最初に引用された第五章冒頭の文に続く文を見てみよう．

「だが，どうして二と三が（成立するのか）．また，どうしてそのような数が全て一つ一つ一なるものへと統合されうるのか．というのも，その場合（或る形相がまた一つの形相であると眺められる場合），一が多数生じるであろうが，端的な一以外にいかなる数も一へと統合されえないだろうから．ただ，人が次のように言うならば話は別である．すなわち，二つの力をあたかも結合体のように一つのものへと束ねてもっている事物が，いやそのような事物に付加的に眺められるものが二なのであると．……だが，そのような仕方ではむしろ，一つであるにもかかわらず，その事物の多（なる要素）にその数だけの一を数として，たとえば十がくびきのように括りつけられる（συζυγῆ）ことになるだろう」(5, 4–14)．

各々のもの毎に一が眺められるという仮説では，一の集積が生じるだけで，他の数の発生を説明できないという困難がある．この困難を解消するために提出される仮説は，一つである事物に複数の力を見出して，その事物にその力の多さだけの数を括りつけるという主旨のものである．この仮説は，各々のものに含まれるかぎりの多なる要素に応じて数が産み出されたという (II) (b) と――数が眺められたものにすぎないのか産み出されたものなのかという違いを度外視すれば――，パターンはほぼ同一と言わざるをえない．こうしてみると 5, 1–14 では，(I) の批判の最中に実は (II) (a) 的パターンが批判され，(II) (a) の代案として (II) (b) 的パターンが提示されるという入れ子式体裁を呈しており，第4章の選択肢が単層的に順次検討されているのではないということが判明する．逆に第5章から第4章を翻って見るならば，第4章の選択肢は固定したものとして第5章以降全篇を貫く分節ではなく，その場その場の議論に応じてかなり流動的な

変貌を遂げるものであると想像しうるのである.

それでは，パターン (II) (a) の代案として提出されたパターン (II) (b) はいかに裁かれるのだろうか．これは，一つの事物に数がくびきのように括りつけられるという説だったが，「くびき」(cf. 11, 5) という語から連想しうるように，たとえば十という数が無理やり身動きできないように特定の事物に固定され，別の事物が十と語られる可能性を閉ざしてしまうことになる[17]．しかるに，十が特定の事物のくびきを脱し，他の事物についても共通に (*κοινόν*, 5, 31; 11, 4) 述語づけられる (5, 29–40) からには，述語づけられるものに先立ち (*πρό*; *πρότερον*)，独立した (*ἐφ' ἑαυτῆς*)，十以外の何ものでもない十自体 (*αὐτοδεκάς*) が存在しなければならない (5, 38–40; 50–51; 10, 34–39)[18]．こうして，プロティノス自身の立場として，数の諸事物に対する独立性 (III)，先行性 (III) (a) が第5章を通じて帰結される.

第6, 7, 8章：諸形相の多面的考察

(I) (II) に対して，数の諸形相からの独立性を主張する (III) は，諸形相の数への従属性という連関を必ずしも否定し去るものではない．むしろ逆に，諸形相は数を獲得 (5, 36) 或いは分有 (10, 14; 15; 13, 50–52) しなければ存立を全うしえない (11, 31–33; 15, 36–37) のであれば，諸形相が数に依存することは明らかである．したがって，第8章からの諸形相と数との連関の詳細な分析へと向かうために，第6, 7章では，直知される対象 (*τὰ πραγματὰ τὰ νοητά*, 6, 2) である諸形相そのものの本性と成立に関して一般的 (*καθόλου*, 6, 6; *ὅλως*, 7, 1) 考察が先取りされるのである.

まず第6章では，可感的質料なき直知界における直知の働きが，質料をもつ事物の単なる定義的把握とは全く性格を異にしていることが示される．後者は事物より後に生ずる思念 (*νόημα*, 6, 11; *ἐπίνοια*, 6, 36) であり，事物の似像にすぎないが，前者は直知対象と同一である真なる知識で

ある．質料なき事物において直知するものと直知されるものが同一であるということは，直知対象と数との関係を追求している我々にとっては，直知対象が直知の受け手にすぎないのではなく，直知のまさに主体でもあると認識を新たにすべきことを告げている．したがって，数と諸形相との関係は必然的に数と直知者（νοῦς）との関係を引きこんでこざるをえない．

次に第7章では，直知される事物が一なる本性のうちに（ἓν μιᾷ φύσει, 7, 1）あること，つまり全形相を包括する一なる本性が直知界であることを理解すべきだと述べられている．全てを包括する一なる本性の，一なる側面を強調すれば，直知対象は実有（τὸ ὄν, 8, 17）として捉えられ[19]，全ての生きものを包括する側面を強調すれば，生きもの自体（αὐτοζῷον, 7, 15; 8, 2），完全な（παντελές）生きもの（7, 16）として捉えられる．

要するに，数と直知される諸形相の間の相互関係の分節化という第4, 5章の枠組みは，第6, 7章を通じて，数と実有，数と直知者，数と生きものとの関係へと多面的に考察し直され，第8章では数が最初に生成したのはこれらのどの位相においてかという問いとして再定式化される．

「さてそこで（τοίνυν）[20]，（直知界は），第一の生きものであり，それゆえ生きもの自体であり，また直知者でもあり，真実有でもあり，全ての生きものと一切の数と正義自体や美自体，その他これに類するもの全てをもっていると我々は言うのであるから，……これらの各々がどのようにあるのか，また何であるのかをそれらについていささかでも発見しうるかぎり探究しなければならない」（8, 1–7）[21]．

次に，実有，直知者，生きもの自体相互間で順位がつけられる．

「そこで，実有が第一のものであるから第一に実有を，それから直知者を，その次に生きものを（というのも，生きものは既に全てを包括しているように思われるし，直知者は実有の活動態である故に，第二のものであるから）という順序で捉えるべきだとすれば，数は生きものに則してあるのではないだろうし（というのも，生きものの前にも一と二があったから），

直知者に則して数があるのでもないだろう．（というのも，直知者の前に実有が一としてあって，そうして多が生じたからである）[22]」(8, 17–22).

三分割された直知界の階層を下から上へ辿れば，生きもの→直知者→実有の順に上昇する．プロティノスはこれらのどの段階で数が第一のものとして（πρώτως, 15, 16）あるかを突き止めようとしている．これは，第15章の推論過程（15, 6–7⇒9–10; 15, 13–15⇒15–16）からもわかるように，どの段階に数が既に現出しているかということではない．多として捉えられるものは何であれ，数の力が行使されてしまっている．数の力が発動し終えたところでは数の原初の姿を押えることはできない．数の発生は数なきところに求められ，一が多になるいわばその瞬間に数を定位することが必要なのである．全ての生きものを含む一切の数である生きもの自体は，これ以上数が付加されえないという意味で直知界の数の極限形態であり，プロティノスの収斂していく方向とは180度逆である．

次に，直知者のうちにも全ての個別的な直知者が部分として含まれている（15, 13–15）のであれば，多数化作用の所産をそこに見出すことはできても，多数化原理そのものはその背後（μετά, 15, 24）まで遡源せしめなければならないだろう[23]．こうして，つまるところ諸形相と数との関係の問いは，実有と数との関係の問いにまで絞りこまれ，真実の数についてのプロティノスの積極的見解が第9章で述べられる．

第9章：真実の数の諸形態

「そこで，実有が自己の分割によって数を産んだのか，数が実有を分割したのか考察することが残されている」(9, 1–3).

前者の選択肢が実有の自己分割を主張するのだとすれば，後者は実有から独立した数による，実有の他者分割を肯定する．後者を選択するならば，それは，実有が第一のものであった（4, 3–4; 8, 18）以上，それでは一体，数はいつどこから生じてきたのかという問題を生むのであろうし，

さらに実有自身の本性，意志（ἠθέλησεν, 15, 31）にしたがって諸有への分割が遂行されると語る箇所（15, 31–32）とも矛盾することになる．諸有はそれぞれ或る特定の数としてあるのだから，数が諸有を「先導する」（προηγήσεται, 9, 12）とは言えても，数が一である実有を先導するとは言えない．実有を先導するのは一だけである（9, 11–13）．こうして，いわゆる一者から実有へ，実有から諸有へという発出過程の外に独立原理として数をたてないかぎり，数を一である実有のうちに定位させなければならない．プロティノスの一見矛盾した言い方によれば，数は実有の数としてではなく，実有のうちにあるのである（9, 25–27）．そして，この実有のうちに，実有とともに，諸有に先立ってある数が数の本質であり（9, 37），第一義的な数（9, 36; 15, 16）であり，統一状態にある数（ἀριθμὸς ἡνωμένος, 9, 29）なのである．

「だが（次の段階では），数の力（δύναμις）が存立して実有を分割し，多を産み出すいわば産みの苦しみの状態へと置いたのである」（9, 26–27）．

統一状態にある数は固定したものではなく，多数化作用の能動者として活動態（ἐνέργεια, 9, 28）へと移行する[24]．実有の本質が数であるとすれば，その本質の活動態も完了態も数であろう．こうして，統一状態の数から自ら展開する数への移行の相の下に捉えられる数，つまり自己自身のうちで動く数（ἐν ἑαυτῷ κινούμενος ἀριθμός, 9, 30–31; cf. 8, 19–20; 15, 25）が恐らく直知者なのであろうし，展開された数（ἐξελιλιγμένος ἀριθμός, 9, 30）が諸有であり，全形相を包括する数（ἀριθμὸς περιέχων, 9, 31）が生きものなのである．数の発生という観点からは，数は実有において第一に押えられるものの，いったんその発生地点が確認されたならば，数は種々の相の下に捉え返されることになる．

第10, 11, 16章：実有から諸有への展開の際の数の機能

次に，我々にとってもプロティノスにとっても最大の関心事は，実有か

ら諸有への展開過程に数の力がいかなる形で介入してくるのかという点である.

「だから，実有が多いものへと呼び起こされ，諸有へのいわば準備が整い，予め輪郭が描かれ (*προτύπωσις*)，諸々の単一子 (*ἑνάδες*, 単数形は *ἑνάς*) が成立して，いわばそれらの上に座を占めるであろうものどものために場所を備えたとき，多において静止した実有が数となる」(10, 1-4).

実有のうちで統一状態にある数が睡眠状態にあるとすれば，諸有への展開途上にある数は覚醒状態にあり，諸有存立の基盤として個々の形相のために一つ一つ前もって型を形成する．その第一歩として単一子と呼ばれるものが必要になる[25]．単一子の特徴は，全体としては複数であること (9, 33; 10, 3; 11, 2-5)．単一子相互間に差異はなく (11, 16-17)，全て同じ階層に属すること (11, 16)，個々のものを一たらしめることである (11, 6)．単一子が複数個だとしなければならない理由は，もし単一子がただ一つしかなく，或る特定の形相にくびきのように括りつけられ (*συνεζεῦχθαι*, 11, 5) てしまったら，他の形相を一とすることが不可能になるからである．通常，個々の形相がそれを分有することによって一となるところの一 (10, 15) は，単数の一自体 (*τὸ ἓν αὐτό*, 6, 1)[26]，一なる本性 (*φύσις μία*, 11, 8) なのであるから，個々の形相が単一子を分有するとは言えない．そこで，単一子は個々の形相が一自体の分有の結果えた，個々の形相に内在する (*ἓν*, 11, 9; 11, 10 bis) 一であるとも考えられる．すると，諸形相が多であるのに応じて単一子も多であるのは当然のことである．ところが，単一子は諸形相に内在する以前にも (*ἱδρυθησομένοις*, 10, 4 の未来形に注目) 多として存在することが先の引用文から明らかである．

それでは，単数の一自体と複数の形相のはざまに，なぜ諸形相によって多数化されるまでもなく多である単一子を措定する必要があるのか．それは，逆に単一子の方が一なる本性の力として発現してきて，実有を諸形相へと多数化するからである．諸単一子は多数化の能動因として，多数の形

相が存立するための外枠の備えに他ならない．諸形相が各々一つとして存立するということは，その本質を他の形相と混ざらないように離して (χωρίς, 11, 23) 切りわける複数の型の存在を前提した上でのことだからである[27]．かくして，多くの単子 (πολλαὶ μονάδες, 11, 23)，すなわち〈多なる一〉(πολλὰ ἕν, 11, 23-24) が諸有存立への第一の基底[28] (βάσις, 9, 38-39; cf. 15, 34-35) を形成する．

しかし，複数の単一子が同列に並存するだけで統一されていない状態は，二とか三とかの数の存立を可能にしないということが，既に第5章でも指摘された (5, 4-7) 難点であったし，他の箇所 (11, 10-12; 14, 46-47; 16, 34-36) でも繰り返しプロティノスの強調するところであった．それゆえ，数の成立のためには複数の単一子の存在理由に引き続き，複数の単一子の統一の事実と統一への過程が示されなければならない．

「諸有に臨む一が多の集合したものであったならば，それぞれのものは「三」が一であるように一であるし，また全ての諸有は単子の場合の一のような意味での一ではないが，「一万」とか或る他の数が一であるという意味で一である」(10, 17-20)．

数の構成要素である各々が一であることに加えて，ここでは数「三」や数「一万」が一である事実が述べられている．その統一の過程は第 11 章でイメージ豊かな言葉でもって描かれている．

「その本性がいわば継起的に産むとして，いやむしろ，産んだものの一つ一つ (の単一子) に止まらずに，産んだ後[29]，いわば結び合わせる (συνεχῆ, 11, 25; cf. 16, 28 συνέχον) 一をつくるとして，もし一方この過程で比較的早めに止まって周りから (結び合わせる一で諸単子を) 包みこむ場合には，比較的小さい数を産み出すだろうし，他方もしより遠くへ動く場合には——他の事物に基づく運動ではなく，自らの運動自身のうちで動くのであるが——，比較的大きい数を存立させるだろう．そして，このようにして各々の数に (単子の) 多を各々適応させ，また各々の数に諸有

の各々を適応させるだろう．というのも，もし諸有の各々が各々の数に適応されないとしたら，諸有の各々は存在しえないか，数を欠き条理を欠いたために逸脱して別のものになってしまう，ということをかの本性は知っているからである」(11, 24-33).

数が成立するためには一つ一つの単一子が何度も産み出された後，単一子の一とは別の意味での一 (10, 19) によって包括される必要がある．そうであることによって初めて相互に没交渉の単一子の集積が有機的な一つの場として生成することになるからである．この場は〈多なる一〉であるとともに〈一なる多〉(cf. ἓν…πλῆθος, 3, 5) である．この多が帰一した場が数であり，諸有存立の第二の基底となる．

引用文の最後で，単一子の統体である数に諸有が適応されなければ，諸有の非存在か自己逸脱が結果する (cf. 15, 35-37) と述べられているが，具体的にプロティノスがどのようなことを思い描いていたのか推測することは，なかなか難しい．恐らくヒントになるのは，第 16 章の一節であろう．

「それ自身で独立の人間自体を或る数だと，たとえば，「動物」と「理性的」とで二であると君が言う場合，……基に置かれたものが二であって，その各々が一であるかぎり，もしその各々の一が協力して実体を完成させるもの (συμπληροῦν τὴν οὐσίαν) であり，各々の一のうちに統一性 (ἑνότης) があるならば，君が言うのは（量的な数とは）別の実体的な数のことであろう．そして，この二は実体より後のものでもなければ，事物の外から単なるどれほどかの量を表現するのでもなく，実体のうちにあるもので，事物の本性を結び合わせるもの (συνέχον; cf. συνεχῆ, 11, 25) である」(16, 20-28).

「人間自体」という一つの形相が，数「二」に適応されているが，一つの形相が「二」である理由は実体構成要素である「動物」と「理性的」の総数が二だからである．これらの構成要素そのものもまた直知界では形相

であるからには，プロティノスはどうやらここで形相間の編み込みを考えているらしい．「動物」と「理性的」とで二であるためには，それぞれの形相がまず統一性をもった一でなければならない．次に，その一つ一つが相互から絶縁状態にあるのではなく，協力し合って第三の形相を完成させるべく，新たな一へと集束しなければならない．こうして，第三の形相「人間」が存立する基底には，先ほど分析したような〈二つの一〉かつ〈一つの二〉である実体的な数「二」の力が働いていると言わざるをえない．さもなくば，人間の非存在か逸脱が結果するであろうから．もちろん，この「二」は「人間」だけに適応されるだけでなく，「馬」にも「犬」にもその他多くの形相に適応されうる共通の力であろう[30]．既に形相に適応された数が実体的な数であるとすれば，未だ形相に適応されていない数は実体の根元（ἀρχὴ οὐσίας, 16, 47–50）と言うべきであろう．

結　び

それでは，プロティノスの考えた真なる第一の数（15, 35; 16, 1–2）とは結局何であったのか．直知界における数とは，諸形相間の離在と結合を保証する実有の力である．第一に，一である実有は複数の単一子として現勢化し，個々の形相が他から離在してそれ自身がまさに他でもないそれ自身として一であるために〈多なる一〉という型を予め備える．第二に，特定数の諸単一子が新たな一へと結集されると，単一子同士の結合が生じ，〈多なる一〉かつ〈一なる多〉という有機的な場が組成される．第一者（τὸ πρῶτον）と実有の紐帯の機能を果たすのが一であるのと平行して，実有が数となって諸有を自己自身に結びつけるという意味で，数は実有と諸有の紐帯の機能を果たすことになる（15, 24–30）[31]．離在化と結合化の両方の力を兼ね備えた数は，諸形相の存立に先立って，最大限の一（τὸ μάλιστα ἕν, 11, 13–14; 17; 18）に続く直知界の次善の一なる構造を基底から既に規制していると言うべきだろう．

註

(1) Porphyrius, *Vita Plotini* 4, 16–19.

(2) J. Bertier, L. Brisson, A. Charles, J. Pépin, H.-D. Saffrey, A.-Ph. Segonds, *Plotin, Traité sur les Nombres* (以後 *TSLN.* と略記する), Paris, 1980, p. 198, Tableau I.

(3) *TSLN.*, p. 10.

(4) *TSLN.*, pp. 10–11.

(5) D, J. O'meara, *Pythagoras Revived, Mathematics and Philosophy in Late Antiquity*, Oxford, 1989.

(6) P. Henry et H.-R. Schwyzer, *Plotini Opera Tomus III Enneas VI*, Oxford, 1982.

(7) A. H. Armstrong, *Plotinus VII, Enneades VI, 6–9*, Cambridge, 1988.

(8) *op. cit.* (2).

(9) l. 3 の *τὸ τὸ* と *ἢ* は，写本通りそれぞれ *τοῦτο, ἡ* と読み，*εἶναι* は Kirchhoff に従って削除する．

(10) 「数について」の直前に書かれた論文 II, 9「グノーシス派の人々に対して」全体が参照されるべきである．II, 9 と VI, 6 の主題の連続性を指摘したものとしては，A. Charles-Saget, *L'Architecture du divin, Mathématique et philosophie chez Plotin et Proclus*, Paris, 1982, p. 107 を参照．

(11) 全体が十八章からなる「数について」の構成について一言するならば，この第2章は第 17 章に内容上対応し，本論を経た後に再び無限数の地位について論じられるのであるから，第2章の解釈に第 17 章を援用することは差支えない．因みに，第 18 章は第1章を補正しつつ直知界への賛歌で幕を閉じている．cf. Saget, *op. cit.*, pp. 95–96. 本論を成す第4章から第 16 章は，分量的にもシンメトリックな外郭によって囲まれた核を形成している．cf. R. Harder, R. Beutler, W. Theiler, *Plotins Schriften B. III b*), Hamburg, 1964, S. 441. *O.C.T.* で行数を数えるならば，第1章から第3章までの合計が 29+17+43=89 行で，第 17 章と第 18 章の合計は 43+52=95 行となり，ほぼ等しい分量で釣り合っていることがわかる．

(12) l. 10 の *ἢ* と l. 12 の *ἢ* を並列と見なすならば，直知界の質料も含めて論じられているようにも思えるが，ここでは一応並列ととらず，l. 12 以降の記述は感覚界の質料だけに絞られていると解しておく．Gatti も後者の立場である．M. L. Gatti, Sulla teoria plotiniana del numero e sui rapporti con alcuni aspetti della problematica delle «Dottrine non scritte» di Platone,

Rivista di Filosofia neo-scolastica LXXV, 1983, p. 375.

(13) *TSLN.*, pp. 38; 149–152.

(14) 4, 2–9 の仮説の区分をめぐって諸家の見解は一致を見ない．恐らく，1. 3 の *ἀεί* を *ἐπιγινομένων* にはかけず，*παρακολουθούντων* だけにかけるため，(I) を二つの異なる仮説に分けるのは，É. Bréhier, *Plotin Ennéades VI*, Paris, 1938, p. 9 と水地宗明『プロティノス全集』第四巻，中央公論社，1987 年，345 頁である．しかし，5, 1–2 では *ἐπιγινομένων* とほぼ同義と考えられる *ἐπιθεωρούμενον* と *παρακολούθημα* が並存して一つの立場として扱われている点，またリズムのように反復して現れる *ἢ οὐχ οὕτως* (4, 6; 4, 9) の句 (*TSLN.*, p. 41) から推して，(I) の細分化は認めがたい．したがって，*ἀεί πότερα* は以下の節で省略されている本動詞にかけることにする．また，(II) を (a) と (b) 二つに分けて考えることについては，*TSLN.*, p. 154 に依る．

(15) „el numero como un concomitante mental de la esencia“, J. Igal, Dos notas al tratado «Sobre los numeros» de Plotino, *Estudios clásicos* 14, 1970, p. 455.

(16) *παρακολούθησις* (付随する意識) と異なり，*παρακολούθημα* は必ずしも思念的存在を意味しない．cf. J. H. Sleeman et G. Pollet, *Lexicon Plotinianum*, Leiden, 1980, p. 807; G. W. H. Lampe, *A Patristic Greek Lexicon*, 1961 (1989[9]), p. 1020.

(17) 5, 14–15 は聴衆の反論 (Saget, *op. cit.*, pp. 115–117) ではなく，プロティノス自身の反論 (Igal, art. cit., p. 462) ととる．或る特定のものだけが二や三であるのではなく，他のものどもも二や三である資格をもつことについては，6, 3 を参照のこと．

(18) アリストテレスによるイデア論批判の洗礼を受けた我々にとっては，プラトンの分有論の再現にすぎないこの議論にはもっと肉づけを期待したいところである．しかし，「どのようにして分取するのかと探究することは，あらゆる形相の分取について探究される共通の問題である」(14, 43–44) という言葉から，この問題の困難さの自覚がプロティノスにもあったことで彼を放免し，我々も彼に倣って当面の論究の範囲をはるかに越える分有のアポリアーへは立ち入らないようにすべきである．ただ，数の先在性，独立性がたんに述語づけの構造からのみ導出されたのではないことは，特に第 10 章の議論を辿れば明らかである．

(19) 「実有は一であったのだから」(9, 25–26)．cf. II, 4, 4, 15; III, 8, 11, 5. T. A. Szlezák, *Platon und Aristoteles in der Nuslehre Plotins*, Basel/Stuttgart, 1979, SS. 98–99.

(20) 本論で私が輪郭を描いたように，直知界が実有，直知者，生きものとして第6, 7章で三分節されてしまっていなければ，第8章のこの始まりの文は理解に苦しむ．ところが，直知者と生きもの相が既に比較的明確に呈示されているのに対して，実有がいかにして導出済みなのか，という問いを立てて，実有が言及されている箇所 (6, 36; 42) に当たっても期待は裏切られる．それゆえ，論述の体裁としては不充分であると言わざるをえないが，事柄自体としては，「不定の二」(V, 4, 2, 7-8; V, 1, 5, 6-8)，「まだ見ていない視覚」(V, 3, 11, 5)，「直知的質料」(III, 5, 6, 44) など様々な名称で呼ばれる実有の性格が，他のプロティノスの論文との比較検討から研究される必要があろう．

(21) 続く文「それでは，第一に一切の感覚を放棄して，直知者によって直知者を眺めなければならない，そして我々のうちにも生命や直知者があることを心にとめなければならない」以下 (8, 7-17) の意味するところが，議論の表の筋といかなる関係をもつのか，当面私には謎である．

(22) 既に上で言及した諸訳も他の諸訳においても，この最後の理由句は大略「というのも，直知者の前に一かつ多である実有があったから」のように訳されるが，これは理解に苦しむ読み方である．なぜなら，多であるということは既に数が先在することを前提にしており，その数に導かれて一が多になるからである．そこで，実有が多であるとすると，数は実有を越えて先在することになってしまうが，数は実有のうちにあり，数が実有を分割する前は，実有はまだ一であったとする箇所 (9, 25-26) と矛盾する．したがって，8, 22 の *καὶ πολλὰ* は削除するか，*καὶ* の前にコンマを打って拙訳のように訳出するしかないだろう．他に以下の翻訳を参照した．M. Ficinus, *Plotini Enneades cum Marsilii Ficini interpretatione castigata*, ed., F. Creuzer et G. H. Moser, Paris, 1855; H. F. Müller, *Die Enneaden des Plotin, 2. Band*, Berlin, 1880; R. Harder, *Plotins Schriften, Band III*, Leipzig, 1936; V. Cilento, *Plotino Enneadi III-I*, Bari, 1949; S. MacKenna, *Plotinus The Enneads*, London, 1962[3]; R. Ferwerda, *Plotinus Enneaden Porphyrius Over het leven van Plotinus en de indeling van zijn traktaten*, Amsterdam, 1984.

(23) 直知者を生きもの自体より上位に位置づけることに関して，その理由はどの箇所においても釈然としない．生きもの自体とは，全てのイデアを包括するイデア界全体を表わし，直知者とはその全イデアを直知すると同時にそれを存立させる (17, 40-41) のだとすれば，直知者と生きものは同列であってよいはずである．完全な生きものの方には，魂も含まれていることを示唆する

箇所 (17, 37–38; cf. 18, 17–18) もあり，その場合直知者だけの階層より数が多くなり順位も降格するのは道理だが，魂をも含む広義なものとして直知界を捉える視点は，ここでは唐突すぎはしないだろうか．

(24) それでは，いかにして数の力が存立してくるのか，一者を通じてなのか，実有自身の必然的展開なのかは，いずれ問われるべき問題であろう．cf. VI, 7「いかにしてイデアの多が存立したのか，および善について」15, 13–22.

(25) 単一子 (ἑνάς) と単子 (μονάς, 4, 4; 4, 7; 10, 19; 11, 16; 11, 17; 11, 18; 11, 23; 12, 1) はプロクロスの場合と異なり同義である．これらの用語の起源はプラトンの *Philebus* 15 a–b にあるが，プラトンにおいても両者は同義である．ただし，プロティノスの場合，形容詞の「単子的な」(μοναδικός, 9, 35) 数とは，実体的な数の影像である量的な数を指すので注意を要する．実体的な数の「実体的な」(οὐσιώδης, 9, 35) という形容詞も実有の数を指すだけでなく，諸有の数，直知者の数など広く指す語であることに留意しなければならない．なお，ヘナデス論の歴史的展望，意義については，H.-D. Saffrey, L. G. Westerink, *Proclus Théologie Platonicienne Livre III*, Paris, 1978 の Introduction pp. IX–LXXVII が詳しい．

(26) この一自体はいわゆる一者を意味せず (5, 36–38)，実有のうちの一 (17, 28)，或いは実有の一 (8, 22; 9, 11; 9, 25; 15, 30) を意味しているとすべきであろう．

(27) *TSLN.*, p. 65.

(28) 11, 23 の μὲν で導入される節の内容を第一の基底ととり，11, 24 の δὲ で導入される節を後述の第二の基底ととる．

(29) 11, 25 の ἢ は Kirchhoff, Bréhier, Theiler に従って εἶη と読む．

(30) cf. VI, 9, 2, 27–29「イデアも一でなく，むしろイデア全体も一つ一つのイデアも数である，そして宇宙が一であるような仕方で一である」．

(31) この箇所の平行関係を厳密に辿れば，一が第一者から派生してきて，第一者と実有とを結びつけると理解される．したがって，ここの第一者は一として顕現する以前の名なきものを指しているように見える．神の名と神本体との断絶と架橋については，拙論「プロティノスの神をめぐって語ること」『哲学』第 93 集，慶應義塾大学三田哲学会，1992 年 1 月を参照して頂ければ幸甚である．

附記—本研究は，慶應義塾大学平成四年度学事振興資金の成果の一部である．